

真説・ドッペルゲンガー

僕はその夜、あの森で確かに彼女の姿を見た。

しかし、彼女にそのことを話すと、彼女はこう言って笑うのだ。

「そんなはずはないわ。だって、私はこの部屋から一歩も出られないんですもの。」

確かに、彼女はこの部屋から出られないはずだった。

彼女の部屋の窓には分厚い強化ガラスがはめられ、ドアについている過剰なまでに頑丈な作りの鍵は、外側からしか開けられない構造になつており、その鍵は彼女の父親を始め、限られた人間にしか渡されていなかった。

外界から隔絶された、この小さな部屋。なぜこのような部屋に、彼女は隔離されなければならなかったのか、その理由について僕は聞かされていなかった。ある者は、彼女の体が、ある危険な伝染病に侵されているからだと言ひ、またある者は、昔起こったある連続殺人事件に、彼女が重要な関わりを持っているからだと言つていたが、そのどれもが単なる噂話に過ぎないようだった。週に二度、唯僕がこうやって彼女の部屋に入り会話をする事が出来るのは、2ヶ月ほど前、新聞の片隅に載つた小さな求人広告に僕が応募したからだだった。外界から隔絶された彼女の、話し相手として僕は選ばれたのだ。

「あなたの言う、その森つて、あそここの事でしよう？」

彼女はそう言つて窓の外を指差した。その部屋は、高台の上にあるお城のようなお屋敷の最上階だったので、その分厚い窓からは、かなり遠くの方まで見渡せるようになっていた。彼女のその白い指先の方角を辿ると、屋敷からほんの二、三百メートル先に緑の木々が生い茂っているのが見えた。

復旧率97%

病院のような、研究所のような施設。

微かに聞こえる電子音。

女性がベッドに寝かされ、身内と思われる男と、医者か研究員だと思われる人物がその様子を伺っている。

林 カズコさん！カズコさん！……カズコさん！カズコさん！

カズコ おんぎゃあ。おんぎゃあ。

林 カズコさん！

カズコ おんぎゃあ。おんぎゃあ。

浜田 どうなんですか！？カズコは……。サポートセンターの林さん！

林 はい。えー、浜田小次郎様、残念ながら……。

浜田 残念ながら？

林 完全に初期化されている状態です。

浜田 初期化……って、いますと？

林 つまり、記憶装置がフォーマットされて、完全に最初に製造された時の状態に戻ってしまっている、と言う事です。

浜田 製造された時の状態？

林 浜田様がこのアンドロイドをご購入されてから、どれくらい経ちますか？

浜田 ……二年です。

林 その二年間、お客様とともに過ごした記憶や、学習した色々な事、全てが消去されてしまった状態なんです。

浜田 消去されてしまった……？

林 おかしいですねえ。間違えて初期化ボタンとか押しませんでしたか？

浜田 初期化ボタン？そんなのあるんですか？

林 マニュアルに書いてありませんでしたか？

浜田 いや、読んだような読んでないような……どこに付いてあるんですか、そんなの？

林 それは……口では言えないような所に。

浜田 え？

林 ……ええ。

浜田 何でそんな場所にボタンをつけるんですか!?

林 なんてそんな所にあるボタンを押すんですか!?

浜田 ……。

林 貴方ねえ、相手がアンドロイドだからって何やってもいいって訳じゃないんですよ!?

浜田 え、いや。

林 ちゃんと同意のもとだったんでしょね？

浜田 いや、とにかく……カズコは直るんですか？

林 うーむ。

浜田 うーむじゃなくて。

林 完全に直るかどうかは分かりませんが、コレを使ってみましょう。

浜田 コレ？

林 我が社の新製品「アンドロイドレスキュー30」です。

浜田 アンドロイドレスキュー……30。

林 我が社が開発したアンドロイドメンテナンス用ソフトです。まずアンドロイドの記憶装置をパソコンにつなぎ、ウィンドウズ95でこのソフトを起動させます。